

令和 5 年 6 月 20 日現在

機関番号：25407

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K04569

研究課題名(和文)音楽教師の専門性と美的価値観形成のための音楽経験プログラム開発

研究課題名(英文)Development of a Music Experience Program for the Professional and Aesthetic Value Formation of Music Teachers

研究代表者

古山 典子(Koyama, Noriko)

福山市立大学・教育学部・教授

研究者番号：10454852

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文):研究期間中に実施した音楽経験プログラムについて、鑑賞時の教師たちの会話の分析・考察を行った結果、同じ曲に対する異なる捉え方に触れることによって新たな聴き方を認識していることが明らかになった。それと同時に、参加者同士の会話から、作曲者が作品に込めた内容の伝達性が認められるとともに、音楽の感じ方の「正解のなさ」への認識が、音楽を聴く行為の可能性を開くことが示唆された。また、本研究では芸術の自己目的性と伝達性について考察し、本来音楽には伝達性が備わっているが、作曲者による「内容の実質」と鑑賞者による受容の齟齬が生じるからこそ、作曲者の意図を超えた新たな「内容の実質」が見出される可能性を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の目的は教師のための音楽経験プログラムを構築し、教師の価値体系の形成及び変容を促すことであったが、研究期間中にCovid-19の感染拡大に見舞われたことによって、当初の計画していた回数での実施は困難な状況となった。回数は限られたものの、作曲家やヴァイオリニストといった音楽家とともに小学校教師に対して実施した音楽経験プログラムでは、教師たちに音楽の捉え方に変容が見られた。その成果は、日本音楽教育学会、日本教育実践学会で発表を行うとともに論文として公表した。また、公共ホール館長、経営論研究者とともに音楽文化振興に関するオンラインシンポジウムを開催し、地域住民に対しても研究成果の公表に努めた。

研究成果の概要(英文):As a result of analyzing and considering the teachers' conversations during the Music Experience Program conducted within the study period, it became clear that the participants recognized new ways of listening to music by being exposed to different ways of perceiving the same piece of music. At the same time, the conversations among the participants revealed the communicative nature of the content that the composer put into the piece of music, and also suggested that awareness of that "there is no right answers" in the way of feeling music opens up the possibility of the act of listening to music. In addition, We discussed the self-objectivity and transmissibility of art, and indicated that although music is inherently transmissive, it is precisely because of the discrepancy between the "substance of the content" by the composer and its reception by the audience that a new "substance of the content" beyond the composer's intention may be found.

研究分野：音楽教育学

キーワード：鑑賞 小学校教師 音楽経験 プログラム

1. 研究開始当初の背景

本研究は、音楽科教育の授業過程において教師の評価を支える価値体系、とくに美的価値観の形成・変容を促す音楽経験プログラムの構築を目的とするものとして開始した。

本課題の設定の背景には、これまでの筆者らの研究から、小学校担任教師の7割強が音楽指導に困難を感じていることが明らかであり、音楽的専門性に不安を抱く教師たちが音楽の質の追求ではなく、教科書や指導書に依存し、その内容を十分理解しないまま指導を行うに留まっている現状があることが挙げられる。教師が自らの音楽性を発揮し、自ら音楽授業を創り出すことを諦める現状があるとすれば、それは音楽科の存在意義を減ずることになりかねない。この課題認識から、とくに音楽の専門教育を受けなくても教員免許を取得し、教員になることができる小学校教師に対して、より充実した音楽科教育の実現を目指し、かれらの音楽指導の拠り所となる美的価値観の形成・変容を促す音楽経験プログラムの策定を行うこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、教師のための音楽経験プログラムを構築し、その実践を通して音楽科教育の授業過程において教師の指導や評価を支える価値体系、とくに美的価値観の形成・変容を促すことである。

小学校教師の音楽指導のありようは、教師自身の美的価値観に大きく影響を受けている。それゆえに、音楽科教育の存在意義は、音楽指導に困難を抱える教師の美的価値観の形成・変容によってより示されるものと考えられる。そこで本研究では、①音楽表現では自分の音ならびに他者の音を聴くことは基盤となること、②これまでの筆者らによる研究から、音楽家や美術家が学校教育に期待するのは「鑑賞する経験」であることが明らかなこと、③音楽を聴き、価値判断できることは音楽指導および評価の根幹となること、という理由に基づき「音楽を聴く力」に着目した。そして、教師自らが音楽を聴き、味わい、価値を見出し、自らの美的価値観に依拠した音楽指導を行う力の育成を目的とした「小学校教師のための音楽鑑賞経験プログラム」の開発を目指した。

3. 研究の方法

本研究課題の音楽鑑賞経験プログラムの特徴は、音楽家をはじめ、多様な音楽経験をもつ者が同じ空間で、さまざまなジャンル・様式の音楽を鑑賞し、自由に語り合うという点にある。それは、まず音楽を鑑賞して、感じたことを言語化することによって、自らの感じ方を明確化できること、また他者との交流によってさらに自身の聴き方を相対化し、なおかつ、異なる感じ方や聴き方を自分の内へ取り込むことで「音楽を聴く力」が育成できると考えたためである。この研究を遂行するための当初の計画は、文献調査による理論的背景の考察、音楽鑑賞経験プログラムの継続的な実施とその分析、音楽授業のフィールドワークを行うというものであった。

しかし、2019年末からのCOVID-19の感染拡大によって、音楽経験プログラムの実施と音楽授業のフィールドワークは多大な制限を受けることとなった。そのため、音楽鑑賞経験プログラムは2回の実施、教師の評価を司る価値観の変容を促す試みとして、同じく小学校教師を対象とした音楽経験プログラム「音楽創作とその評価」(英国からConductive Musicを招聘)を1回実施するに留まった。

音楽鑑賞経験プログラムの実施が困難となる中、その代替として熊本県立劇場及び研究分担者である熊本大学瀧川淳准教授による「ケンゲキ オンラインスクール～音楽を聴こう知ろう～」

の視察と分析・考察，ならびにオンラインシンポジウムを，ふくやま芸術文化ホール館長である作田忠司氏と経営戦略論・マーケティング論の研究者，池澤威郎氏とともに研究代表者である古山が登壇し，開催した。

4. 研究成果

(1) 本課題に関わる理論的考察

①何を「芸術」と呼ぶのかという点についての知見の整理の過程で，芸術は自己目的的行為でありながら，他者への伝達性をもつという2つの方向性を含んでいることを示した。この「自己目的性」と「伝達性」は，芸術が原理としてもつ矛盾であり，特性でもある。つまり芸術の自己目的性が，芸術体験が基本的に個人的なものであることを示しながら，伝達性をもつということによって芸術が社会性を特性として併せ持つことを表している。渡邊護は，芸術を鑑賞する時，外的世界と隔絶した個人的な体験のうちに閉じこもろうとすると指摘しながらも，「外界から断絶した個人的体験である芸術は，伝達によって現実界へ引き戻され（略）」，「人と人，人と集団，あるいは集団と集団との連関に於いて芸術は成立つ」という（p. 37）。そしてそれゆえに，「芸術は文化現象として公的な存在資格を持つものとなり，社会の中に組入れられる」と述べる（同）。

つまり，芸術の「自己目的性」と「芸術の伝達性」という特性は矛盾しながらも，芸術が内包する特性として，他者とのかかわりが芸術を文化とする重要な要因となっていると考えられる。だからこそ，積極的に音楽を解釈する機会を与え，解釈を導き，他者の多様な価値観に出会う場として，音楽科の鑑賞は必要となる。

そして，本来音楽には伝達性があるものの，作曲者によって込められた＜内容の実質＞と鑑賞者による解釈との間に齟齬が生じることは禁じ得ない。そこでは，さまざまな文化的背景をもつ鑑賞者による解釈によって，作曲者の意図を超えて新たな＜内容の実質＞が見いだされる可能性さえある。この連続と続く鑑賞行為こそが，音楽を文化たらしめているといえる。また，美学者である佐々木健一が「芸術の公共性は，多くの鑑賞者の中での芸術概念の共有を要請し，それは芸術教育，討論，批評などを芸術現象の本質的な要素として位置づける」（p. 242）と述べるように，個々人の内で鑑賞そのものは成り立つが，「芸術教育」を意図したとき，鑑賞の対象となる楽曲の解釈について鑑賞者の間で「分かち合う」ことは，その芸術（ここでは楽曲を指す）に公共性をもたらすとともに，それを共有することによって鑑賞者に文化的な共同体への帰属を促す。以上の考察から，本課題における音楽鑑賞経験プログラムの意義を明示した。

②音楽科教育で目指してきた「鑑賞」とはどのようなものであったかを明らかにするために，我が国での音楽鑑賞のあり方，ならびに小学校学習指導要領を昭和22年第一次（試案）から平成29年改訂（現行）の第九次学習指導要領までの音楽鑑賞の扱いについて考察した。その結果，音楽科教育では「芸術的な音楽」に触れさせることを通して，音や音楽に豊かに関わることができるようにすることを目指してきたことを示した。ここでの「芸術的な音楽」とは，教育で扱うべき主たる楽曲であるが，それは明治期の「近代化＝西欧化」の風潮の中，当時「芸術」そのものが新しい概念であり，西欧における19世紀美学を背景にその概念ごと日本に取り入れた結果，集中して聴くに足る音楽として「クラシック音楽」が位置づけられたことを明らかにした。

(2) 音楽鑑賞経験プログラムの分析

音楽鑑賞経験プログラムは，小学校教師と音楽家ならびに筆者らが参加して行った。第1回目の音楽家ゲストは作曲家（小学校教師の参加者：17名），第2回はヴァイオリニスト（小学校教師の参加者：10名）である。なお，本プログラムの内容は，図1および図2に示した通りであ

り、ここで扱う楽曲のジャンルは多岐にわたるよう意図している。

第1回プログラムでの教師の発言内容の分析結果（抜粋）を、図3に示す。図3は、クラシック音楽として認知度の高いJ.S.Bachの《インヴェンション第1番 BWV772》について、1回目の鑑賞後に自由に感想を述べ合った後、作曲家による楽曲分析を行った上で再度鑑賞した際の教師の発言内容の共起ネットワーク図である。

楽曲分析を経験した後の鑑賞では、図3からも明らかなように、楽曲に対する言語化はより具体化しており、なぜそう感じたのかを理解している様子が見られた。また、発言内容の分析から、他者から語られた言葉への違和感は、多様な聴き方があることへの気づきや、他者の捉え方への理解を生じさせていることが示された。

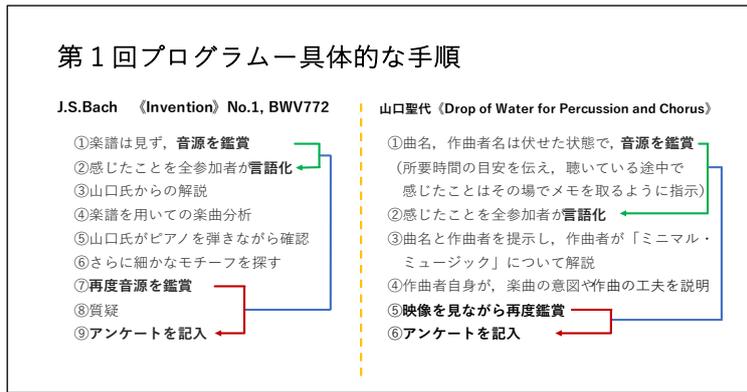


図1 第1回音楽鑑賞経験プログラムの手順

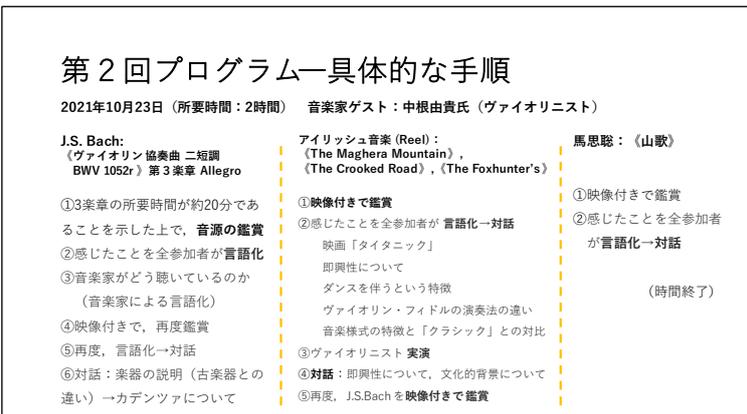


図2 第2回音楽鑑賞経験プログラムの手順

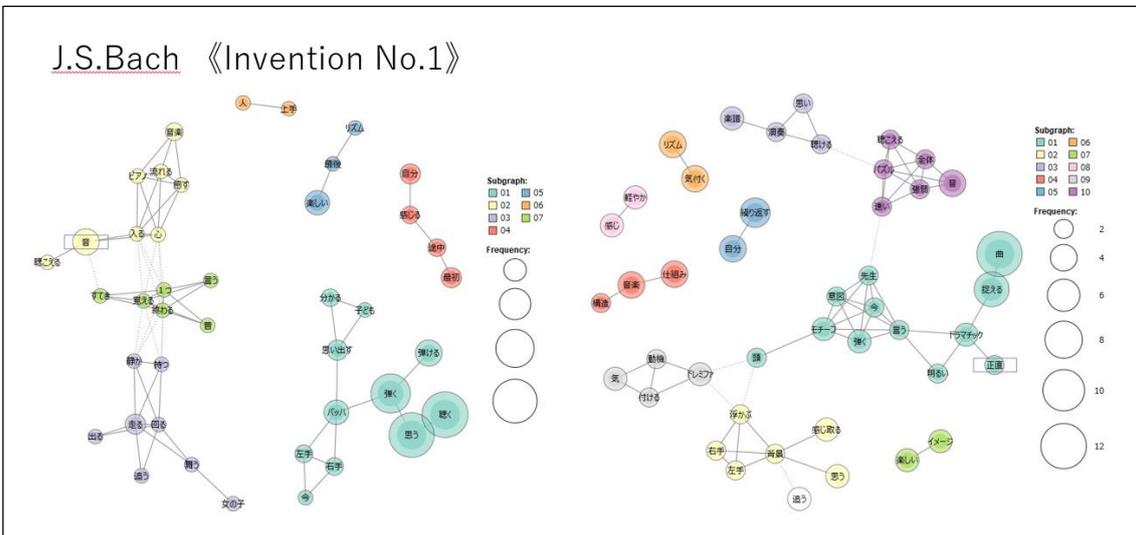


図3 教師の発言内容の共起ネットワーク (左: 1回目, 右: 2回目)

第2回プログラムでは、1回目の鑑賞を音声のみとし、その後2回目は映像付きでの鑑賞としたが、映像付きでJ.S.Bachの《ヴァイオリン協奏曲 二短調 BWV 1052r》第3楽章 Allegroを鑑賞した場合、映像によって鑑賞者の発言内容が「イメージ」から、曲の構成や編成といった音楽を構成する諸要素に目を向けられるようになっていたこと、また一人ひとりが、感じたことを自由に発言できるようになることが明らかとなった。

本課題の音楽鑑賞経験プログラムの実施ならびに分析を通して得られた知見は、以下の3点に集約できる。

- ・音楽の感じ方の「正解」に対する参加者の認識が、「聴き方」の柔軟さに関連している。
- ・音楽鑑賞においては、聴き取った音楽的な諸要素を手掛かりに、それが何を表しているのかを自分の音楽経験や情景のイメージと結び付けて語る傾向がある。
- ・共に聴き、語り、交流することが、音楽の感じ方を揺さぶるものであること、そして「聴き方」を拓く可能性が見いだせた。

(3) オンラインシンポジウム「福山市の音楽文化振興のこれから—ふくやま芸術文化ホールリーデンローズを視点として—」

このシンポジウムは、前述した通り COVID-19 によって音楽鑑賞経験プログラムの実施が困難な状況に陥ったことから、理論的な考察とコロナ禍における人と音楽を取り巻く環境の大きな変化、つまり、鑑賞者が一同に会しての演奏会やライブ等が中止になる中で、他者とともに聴くという形態での音楽鑑賞の今後の展望を示すことを目的として開催した。

シンポジウムは2部構成とし、第1部「シンポジウムの設定課題のバックグラウンド」では、「ふくやま芸術文化ホール リーデンローズの概要」、「学校教育と『クラシック音楽』」、「『クラシック音楽』の位置づけ」、「百貨店が音楽文化振興に果たした役割」、続く第2部では「今後の音楽文化の振興に向けて」では、「学校教育×文化施設としてのホール×経済の視点から」、「コロナ禍の中での取り組み」、「音楽文化のデジタル化—何がほんもので何がにせものか」、「リアルとデジタルは対立関係なのか」を内容として展開した。

ここでは、公共施設としてのホールの現状や今後果たすべき役割等について、現実と仮想現実において「音楽を聴くこと」を考えるとともに、文化の継承・発展を経済的な視点から捉え、新たな可能性の提示を視野に入れた議論を展開した。なお、このシンポジウムは、地域住民に対する研究成果の還元の一環として位置づけたものである。

(4) 総括—課題と展望

COVID-19 の感染拡大は、他者とともに音楽を聴くという経験に多大な制限をもたらした。しかしこの状況は図らずも、人々がリアルな体験として「ライブ」に行き、他者とともに音を聴き、共有することを求めていることを顕在化したといえるだろう。これは、人が音・音楽によって引き起こされる情動を他者と共有することを求める存在であることを示している。このことは、「ケンゲキ オンラインスクール」の視察と分析・考察においても明らかとなった。

前述したように、個人の中で音楽鑑賞そのものは成り立つが、学校教育などの場において他者とともに音楽を聴き、各自の解釈を分かち合うという行為は、その楽曲の公共性に関わる行為である。それゆえに、「分かち合う」ことは、その芸術に公共性をもたらし、共有することによって文化的な共同体への帰属を促す点で、本プログラムは音楽科の鑑賞活動に対しても重要な示唆をもつ営みといえる。

研究の課題として、まず音楽鑑賞経験プログラム自体が十分に実施できなかった点が挙げられる。また、音楽鑑賞経験プログラムの実施にあたって、ファシリテーターの役割を担う筆者らに、参加者の対話をどのように成立させ、展開させていくかという技能が求められること、そしてそれが、プログラムの有効性に大きく関わることが示唆された。この点を今後の課題として、引き続き修正を加えながら、音楽鑑賞経験プログラムの実施・検証に取り組みたい。

<引用文献>

- 渡邊護 (1983) 『芸術学 [改訂版]』東京大学出版会, 262P.
佐々木健一 (1995) 『美学辞典』東京大学出版会, 248P.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計8件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 瀧川淳, 古山典子	4. 巻 19
2. 論文標題 オンラインライブコンサートの教育効果と可能性について 「ケンゲキオンラインスクール」を鑑賞した教師の自由記述回答の分析から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 音楽教育実践ジャーナル	6. 最初と最後の頁 43-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 早川倫子, 小川容子, 古山典子, 井本美穂	4. 巻 176
2. 論文標題 音楽科授業における達人教師のワザ 効果的な説明にみる動的な特徴	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 岡山大学大学院教育学研究科研究収録	6. 最初と最後の頁 69 77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18926/bgeou/61468	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Noriko Koyama	4. 巻 7
2. 論文標題 Various Effects Inspired by Creating Music with Digital Audio Workstation	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 International Journal of Creativity in Music Education	6. 最初と最後の頁 65-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古山典子	4. 巻 8
2. 論文標題 教師の「音楽を聴く力」を育む音楽経験プログラム(1) 理論的背景と実践の考察	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15096/fcu_education.08.05	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古山典子	4. 巻 7
2. 論文標題 音楽科における鑑賞教育に関する基礎的考察 学習指導要領における「鑑賞」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15096/fcu_education.07.04	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古山典子	4. 巻 3
2. 論文標題 音楽科における鑑賞教育に関する基礎的考察	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 学校音楽教育実践論集	6. 最初と最後の頁 51-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 上野亜希子, 神古麻弥, 佐分利小夜子, 高橋元子, 永井益子, 古山典子	4. 巻 7
2. 論文標題 保育士および幼稚園・小学校教員養成課程における音楽実技能力育成の現状と課題	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1 17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15096/fcu_education.07.01	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 古山典子, 瀧川淳	4. 巻 6
2. 論文標題 質問紙調査に見る教師の音楽指導観 自由記述回答の計量テキスト分析を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 福山市立大学教育学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 19-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15096/fcu_education.06.03	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 古山典子, 瀧川淳
2. 発表標題 小学校教師を対象とした音楽鑑賞経験プログラムの実証研究
3. 学会等名 日本教育実践学会第25回研究大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小川容子, 古山典子, 井本美穂, 早川倫子
2. 発表標題 「達人」とされる音楽教師のワザ 言語による説明に着目して
3. 学会等名 日本音楽教育学会第51回オンライン大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 古山典子
2. 発表標題 小学校教師のための音楽経験プログラム(1) 「音楽を聴く力」の育成に着目してー
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回東京大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 古山典子
2. 発表標題 音楽科における鑑賞教育に関する基礎的考察
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第23回全国大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 古山典子
2. 発表標題 趣味としての音楽ソフトによる創作活動における音楽活動の様相
3. 学会等名 夏季音楽教育研究会（聖心女子大学）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 瀧川淳編著，今泉徳人，桐原礼，後藤匡敬，小梨貴弘，古山典子，酒井美恵子，立山裕美，中島千晴，三浦雅展，南川朱生，山中和佳子著	4. 発行年 2022年
2. 出版社 明治図書出版	5. 総ページ数 136
3. 書名 1人1台端末でみんなつながる！音楽授業のICT活用ハンドブック	

1. 著者名 有本真紀，阪井恵，津田正之編著，古山典子ほか20名著	4. 発行年 2021年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 222
3. 書名 新版教員養成課程小学校音楽科教育法 2022年改訂版	

1. 著者名 日本音楽教育学会編，古山典子ほか111名著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 音楽之友社	5. 総ページ数 247
3. 書名 音楽教育研究ハンドブック	

1. 著者名 有本真紀, 阪井恵, 津田正之編著, 古山典子ほか20名著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 教育芸術社	5. 総ページ数 221
3. 書名 新版教員養成課程小学校音楽科教育法	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	瀧川 淳 (Takikawa Jun) (70531036)	国立音楽大学・音楽学部・准教授 (32611)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------